

【10月5日まとめ】

私への実際の評価による「やさしい人間関係」の分析。感情でつながる関係から理性でつながる関係にシフトしたいということ。けれど、理性でつながる関係は、料理番組でよくある「完成品がこちらに！」のようなものに思えるということ。相対的価値と絶対的価値。

「やさしい人間関係」を作る人は、自分に過保護であり不安定であることは、これまでも確認してきた。こうしたキーワードを再確認し、自分がいかにこの関係に浸っていたかを示す言葉に出会った。

大学3年の秋ということで、それなりに就職について考えたりもしている。すると、当然、面識のない人と話す機会が増えた。そこで、気が付いたのだが、どうも私は他人に不安定な人だという印象を与えるらしい。「大丈夫なの？」と何かを心配されることが多い(4名の意見)。これについては本人も、不安定だなあと自覚しているのでまあいいとして。問題は、「そんなに頑張らなくてもいいのに」や「考えすぎだと思うよ」という言葉を7名からもらったということだ。考えてみると、檜垣先生にも似たようなことを言われたことはあるし、昨年卒業した先輩にも言われた気がする。これはちょっと考慮すべき事態ではないだろうか。いったい私の何が彼らにそのような印象を与えるというのだろうか。確かに、私は、人と会うときには頑張っていると思うし、「こう思われたかな」という選択肢を幾通りも考えている。しかし、それは、対人負荷を下げるために行っていることであり、私は、人と会うときには、頑張らざるをえないし考えざるをえないのだ。ゆえに、「そんなに頑張らなくてもいいのに」や「考えすぎだと思うよ」という言葉が、私へのアドバイスだというのなら、それは不適切である。私としては「こうこうこうすれば対人負荷が下がって、もっと気楽に人と話せますよ」と言ってもらいたいものである。

ただし、これらの言葉がアドバイスではないという場合も考えられる。特に前者の言葉は、不快の表明とも読める。人と会うときに頑張ったり選択肢を考えたりする私の行為は、結局相手ときちんと向き合うことより、自分を守ろうとすることを重視するものだからだ。自分に過保護なのである。そして、なぜこんなにも頑張ってしまうのかというと、他者のリアクションが、即自分の評価、自分の価値であると思っているからだろう。「やさしい人間関係」においては、ノリや空気につながるので、その場その場で自分の価値が大きく変動する。他者の言動とは、私を容赦なく裁くものである(ように思える)。そのため、相手の発する一言一言に神経を張り詰め、一時的な評価を過剰に気にかけることになる。また、そのつど共通のものを作り上げていくわけだから、それに乗れなくなれば、モンスター(共通性がなく理解不可能な異物)扱いをされることになる。毎日モンスター予備軍と、外でも内でも対峙しているわけなのだから、日々人間関係に安心感を抱けず、自己肯定感の基盤が不安定なものも当然だろう。さらに、感情やノリでつながるこうした関係は、言葉や内容が重視されないため、たとえ、その場で感謝や賞賛を受けても、次回も同じ評価が得られるかはわからず、むしろ不安の元になる。

これに対して、理性的につながる関係は、普遍性や永続性を得ることができて、自己肯定感の基盤は安定している。では理性でつながるといふのは、どういうことか。「コップや椅子に話しかけることをしないように、言葉を行使する対象には、理性を認めている」というレベルではないはずだ。なぜなら、仲良く話をする友だちには「理性的につながる」といふときの理性を認めているかといふと、そうでもないからだ。『人間失格？』（土井隆義、日本図書センター）82ページに、「万引を絶対にやっていけないことだ」と考える人は全体の約88%を占めるのに対し、「万引を絶対にやっていけないことだと友だちも考えているだろう」と考える人は、10ポイント以上も低かった、という話が挙げられていた。これは、「友だちと自分が同じ考えだとは思えない」という例だと考えられる。もっと言えば、「たとえ考えが違っていても、話し合えば同じ考えになるかもしれない」という発想が欠けていることを示している。理性でつながるといふときの理性は、こうした友だち関係にも使う打算や言葉の使用のためのものではなく、自由な人格の基盤となるものだろう。

ここでは、他者を他者として、自分を自分としてみるということが要求される。つまり、相手の人格と自分の人格を、何か目的（幸福）のための手段としないということだ。基本的に、我々は自分をえこひいきして、自分により多くの幸福を与えようとしている。しかし、そのえこひいきには何の根拠もないと自覚すること、すなわち、ただ自分のみに絶対的な価値があるといふのは思い込みだと自覚することで、異質な他者が発見される。そしてようやく、「みんな理性的存在」という意味で、自分にも絶対的価値が見出されるのである。

だが、相手を手段ではなく異質な他者として捉えることが要求されるからといって、「そう捉えるために必要なものは何か」などと考えていては、いつまでも絶対的な価値を見出すことはできないであろう。なぜなら、目的のための価値とは相対的であるからだ。よって、理性的につながっているときには、「相手は手段ではなく異質な他者（人格）だ」というから思う」という状態がある。たとえ、「相対的価値に振り回される人間（その最たる例がやさしい人間関係でつながる者だと思ふ）は本質的に不安定だから、そこから脱したい」と思つても、「そのために」何をすればいいかや、どう考えればいいのかという過程は、飛び越されなければならないのだ。それは、極端な話、料理番組で「白玉粉を用意します。水も用意します。はい、白玉団子の完成品がこちらです！」というよふな、「他者が必要です。自分はもちろん必要です。はい、理性的関係がこちらです！」というものとして、聞こえてしまふ。これは、白玉粉と水を混ぜてこねて丸めることは誰でも知つていふだろうといふこと、つまり、人間なら誰でも理性的関係がどういふものなのか知つていふことなのか。正直、肝心なところで突き放された気がする。